



先ほどの問い、すなわち「私たちの人生は畢竟何の意味があるのか」「私たちの人生の方向は何か」「人は本来、何を願うか」という大事な課題をほったらかしてきた私たち。その私たちが生み出している精神状況は、さまざまな社会現象となつて吹き出している。これからますます顕著になるであろう。

こうした人生の根本の問いに私たち一人一人が答えを迫られているのである。そうした問いに答えるものこそ「永遠のまこと」「限らないまこと」であり、私たちが南無阿彌陀仏と教えられてきたものである。そのまことをほかならぬ私自身がただくのが浄土真宗なのである。

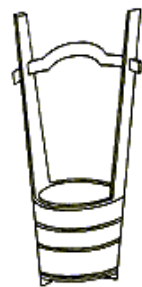
江戸時代の末期に、お軽さんという厚信の妙好人がいた。彼女は関門海峡の六連島にすんで半農半漁のごく貧しい生活をしていた女性であるが、そのお軽さんの作られた「おかる山行き歌」に

おかるおかると  
ゆり起こされて  
あいと返事も  
あなたから  
聞いてみなんせ  
まことの道を  
無理な教えじゃないわいな  
まこと聞くのは  
お前はいやか  
何かのぞみであるかいな

自答しているお軽さんの言葉が、時を超えて今の私たちの胸に突きささる。貧しく不自由な生活を強いられた江戸時代の庶民の一人だつたお軽同行。そんなお軽さんの胸に燃えていたこの「願い」は、江戸時代と比べて断然暮らしやすくなつた私たちに「まこと聞くのはお前はイヤか」と呼びかけ、「お前は一体何をこの人生に望んでいるのか」と鋭く問いかけてくる。

さて、「まこと」を辞書で引くと、真、実、信などの漢字が出てくる。ま、真、実、信などという意図がある。真はほんとうのものでウソや偽りがなく、まはまことである。それは決して人をだまさない、そういうものをまことという。卑近な例を出すと、バブル期に「土地を買ってあげば絶対損しない」ということが盛んに言われた。この言葉を信用して必要でもないのに貯金をはたいて土地を買った人がかなりいた。ところがバブルがはじけてみれば、土地は半値以下に下がった。今となつては「土地を買えば絶対損しない」という言葉は偽りである。そういう言葉は「真」なる言葉ではない。

アマミダが「我が浄土に生まれると信じて念仏申せ」という誓いはまことであり真であるというの、この誓約に信順する人を裏切らないからである。だまさないからである。アマミダの誓いに信順する。だから弥陀の本願はま



花桶  
(C)SHOGAKUKAN INC.

ことであり真であるというのである。

さらにまことには実という意味がある。実とは中身が詰まっていることである。上皮はあるが中身がないのは「虚」という。先日、おいしそうなカニを買って、湯がして食べようと、カニの足の殻をあけると、中がスカスカであつた。それこそ実がない。実がないのを虚という。

表面は立派だが、中身が空虚なものは至る所にある。とことろで南無阿彌陀仏はまことであり実である。中に仏の真なる功德がいつぱい詰まっている。すなわち法蔵菩薩の願と行（修行）の結果が詰まっている。私たち一人一人を浄土に生まれしめる願と行が仕上げられている。だからこの南無阿彌陀仏をいただいて称える人は、浄土に生まれ因をたまわるのである。南無阿彌陀仏はそのように中身が詰まっている。だからまこと（実）であるといわれるのである。真「実」功德なのである。

また、まことは「信」とも書く。上に述べたように、南無阿彌陀仏は、法蔵菩薩の真実まことの行いによる真実功

徳が充足している。それゆえ阿彌陀仏の本願を信じて念仏申す人は、きつと必ず阿彌陀仏の撰取の大悲に包まれて浄土に生まれることが出来る、このことに偽りが無い。そういう真であり実もある真実まことなるゆえに、信順するに値する。信順に値するものゆえまことという。そういう意味のまことを「信」という。阿彌陀の本願は真実なるゆえに、万人が「信順する」に足るものである。

なお、まことは真心（まごころ）ともいえる。まごころは純粹な慈悲の心である。浄らかな「なまきけ」がまごころである。阿彌陀仏はかぎりなきまごころを我らにそそいでくださる。いわゆる限りなき慈悲そのものである。

次に上げる詩は西条八十さんのもので、奥さんを亡くされた時の詩だそうである。この詩は、まごころというものの大事さを亡き奥さんに寄せて歌われたものと思う。

まごころの花  
この世のことはみんな夢  
すぎてしまえば跡もなし

咲いて残るはなんの花  
それは尽くして尽くされた  
まごころ まごころ  
まごころの花

南無阿彌陀仏のお念仏は、阿彌陀仏のまごころの結晶である。この世のチリにすぎないような私に目をかけてくださった。空しく暮れゆく私を永遠の救いにあずからせたいとて、ご自身を苦海に沈めて難行苦行の長きご修行をされた。救われるべき資格も価値もない私のために、尽くして尽くして尽くしてくださつた如來のご恩。そのまごころの結晶を南無阿彌陀仏として私に与えてくださった。

以上、まこととはどういうものか。そうして限りなきまことを南無阿彌陀仏として私たちに廻向して下さっていることを述べた。

このまことに出会ふこと、そのことが私たち日本人、否世界の人が、今もつとも心を寄すべきものではないであろうか。（了）

# 真宗聖典講座

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとりの弟子、という相論のそうろうらんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかつて、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。

## 〈歎異鈔第六章第二講〉

親鸞聖人は「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」と言われ、その理由は自分の力で他者に念仏を申させたのなら私の弟子かもしれないが、アミダ仏のお計らいによって、念仏しておられる人をどうして私の弟子などといえようか、まことに途方もないことです、と仰せられています。

第五章でも念仏は私の側から作る善でも励む行でもないとされていますが、裏から言うとな念仏はアミダ仏からいただいて称える行であるとの意であります。ここでも、「弥陀の御もよおしにあずかつて、念仏もうしそうろう」と言われ、私たちが念仏申されることは、凡夫の側から起こることではなく、アミダ仏からのもよおしによって申されるのであるとお示し下さいます。念仏となつて私たちの口に称えて下さるのはアミダ仏の大悲の力、ご念力によつてであると、申されるのであります。

聖人は、お念仏が世の中に広まり、人びとが念仏申すようになる源は、アミダ仏の本願の力によるものだと見ておられます。そう見られる根拠は、佛説無量寿経の中に説かれております。アミダ仏はもと法蔵菩薩の時に一切衆生を助けんがために四十八通りの誓願を起こされました。その第十七番目の願に「たとく我、私を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ」

(口語訳)「わたしは仏になるとき、すべての世界の数限りない仏がたが、みなわたしの名をほめたえて称えないようなら、わたしは決してさとりを開きません」

と誓われています。聖人はこの誓願に大事な意義を見出されました。この第十七願で何を法蔵菩薩は願っておられるのでしょうか。それは、この四十八願の後に重ねて誓われた誓いの中に明瞭に出ているのです。それは三誓偈といわれている仏説無量寿経の經文です。それによりまして、

「我、私道を成るに至りて、  
名、声十方に超えん。  
究竟して聞ゆるところなくは、  
誓う、正覚を成らじ」

(口語訳)「わたしは仏のさとりを得たとき、その名はすべての世界を超えすぐれ、世界のすみずみにまで届かないようなら、誓ひて仏にはならない」とあります。法蔵菩薩は、名、声(南無阿弥陀仏の御名)を十方の衆生に聞かせたいと願われています。それは南無阿弥陀仏の名(名号)によって、一切衆生を救おうとされるからです。そこでアミダ仏は、南無阿弥陀仏の名を十方の仏たちがほめたたえて称えるようにと願われたのです。それによって衆生が、諸仏のたたえる南無阿弥陀仏を聞いて、南無阿弥陀仏の名をいただいて称え、救われてほしいと、法蔵菩薩(アミダ仏)が願われたのです。ですから諸仏がアミダ仏の名をたたえて称えるようになったのは、アミダ仏の誓願の念力から起こつたのです。

諸仏とは、あらゆる仏国を教化される仏たちのこととす。この娑婆世界(南閻浮提)は釈迦仏の教化される世界ですから、釈迦佛はアミダ仏の第十七願を受けて南無阿弥陀仏の名のお徳を讃嘆されたのであります。それがまさに仏説無量寿経となり、また觀無量寿経や阿弥陀経の教説となつたのです。

これらの浄土の經典に説かれたアミダ仏の本願の思召しを受けて、アミダ仏の御名をたたえられたのが天親菩薩・曇鸞大師・善導大師・法然聖人など七高僧たちです。七高僧たちが南無阿弥陀仏をたたえて称えられる姿は、第十七願の力から流れ出たものであり、聖人は七高僧を諸仏といただいておられます。そうした諸仏の名号讃嘆を通して、聖人はお念仏をいただいて申す身となられたのであります。アミダ仏の本願力から起こり、本願力が躍動してい

る姿であります。

また七高僧だけでなく、信心の念仏者をも聖人は諸仏に等しい方と見ておられます。それはアミダ仏のお心にふれ、仏の心の分かつた人であるから、仏と等しいといわれるのです。聖人は

「華嚴経」に、「信心歡喜者与諸如来等」というのは、信心をよるこぶひとはもろもろの如来(仏)とひとしというなり。」

という「華嚴経」のご文をしばしば引用され、信心の念仏者は仏と等しいお方であるとお示しになつて

います。信心の念仏者は第十七願の諸仏のごとくであり、その諸仏の名号讃嘆によつて、無数の念仏者が誕生して行くのでありましょう。

たとえば、鳥取県の源左同行は、「ようこそようこそこんな者を、ナンマンダブツナンマンダブツ、ありがとうござんす、ナンマンダブツナンマンダブツ」と、お念仏をいつも喜んでおられたそうです。それが村の人びと、周辺の人々に、自然にお念仏の徳が流れ、念仏をいただいて称える人たちがたくさん生まれました。別に源左さんが人に念仏を伝えなければならんと力んだり計らつたりしたのではなく、ご自身が自然に念仏を喜び、感謝と懺悔の生活をすると、源左さんの名号讃嘆の生活が周囲に、念仏者を生み出していったのです。これが第十七願の具體的な働きの姿と言つていいのでしよう。

さて、そのように凡夫が本願の念仏を申す身になるのは阿弥陀仏の願力・念力のおかげであつて、人間の側からの計らいや力に依るのではないと聖人は感じておられました。ですから、聖人のお勧めを縁として念仏申す人が誕生しても、それは聖人の功績でもなければ人徳でもなければ学問の力でもない、ひとえに阿弥陀仏が「我が名を生きたし生けるものに与えて称えさせて救いたい、救わずばおかぬ」という大悲のご念力によるのであると領解しておられました。また聖人自身がアミダ仏の大悲の誓願力のご恩によつて念仏をいただかれたことを身にしみて感じておられたのであります。それゆえ聖人のご説法を縁として念仏する人が生まれても、「彼は私の指導力によつて念仏するものとなつた私の弟子である」とは決してお考えにならないのであります。「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」と申されたのは、こうした聖人のご信心からの発言でした。(了)

# 金子大栄師の言葉

親鸞聖人の御一生の経験から出てきたものは何であるかというところ、「ただ念仏して」ということである、さればその中にあらゆる人生経験がおさまっておるのである。それを本願の方から申しますれば、「わが名を称えよ」という一句の外に五劫思惟もなければ永劫の修行もないということでもあります。五劫の思惟というも、永劫の修行というも、仏の慈悲というも、本願というも、要するに「わが名を称えよ」という一句におさまる、ただそのために仏は苦勞されたのである。その「わが名を称えよ」という一句が本分に聞こえたら、この胸が破れなければならぬ。五劫思惟がどうの、永劫の修行はわからぬというのには、要するに「わが名を称えよ」と仰せられるそのお心持ちを知らないから言うに過ぎないのである。わかってみれば南無阿彌陀仏の回向より何ものもないのである。「わが名を称えよ」、その一句の中に仏の全生命がこもっておるのである。その一句の御回向の恩徳広大不思議にてわれらが救われるのであります。

(金子大栄『正像末和讃講話』下より)

金子大栄師は明治以後の真宗学者としては第一人者であることはいまよく知られている。先生は真宗大谷派の僧侶でありつつ大谷大学で長年教鞭をとられていた。私が大谷大学に在学中、直接先生のご講義を聞かせたいだけのこと、また京都の高倉会館で何度も先生のご講話を聴聞させていただいたことは幸いであつた。しかし、先生のお話は有り難いと思つてもその当時は、なお真宗の核心を理解するに至らず、それゆえ金子先生は偉いと思つても、心底から信服していただけではない。それは、当時「先生は偉大である」という周囲の評判にかなり影響されて、そのように思つていたのである。しかし、先生は既にこの世の人ではなかつたが、先生の書かれた

た書物を再読するに及んで、真に先生の有り難さ、尊さをいささか理解することができた。先生の残された著作の価値はまだ世の中に伝わっていない。これからますます読まれるべきものである。ことに晩年の著作などはまさに深甚な宗教性の顕現だけでなくすこぶる芸術的な香りがする。上に先生のご講話の一節を載せさせていただいた。

以下は蛇足的な私の領解——「親鸞聖人の御一生の経験から出てきたものは何であるか」と、「ただ念仏して」ということである」と。親鸞聖人のご生涯の結論はどういう言葉で表現されるのであるか。それを端的に表白されたのが、かの有名な歎異鈔の「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」のお言葉である。この「ただ念仏して」の中に、聖人の「あらゆる人生経験がおさまっておる」とのこと。人生のあらゆる難儀なことも悲しいことも不条理なことも憤りさえも、この「ただ念仏して弥陀に助けられていく」一生の中におさめられ、受け止められ、消化され、育てられる。そういう人生を聖人は生きられたのである。私たちがそのように生きることができると、生きられるべきであろう。

「ただ念仏して」が我が身の上に、我が人生に現れてくる源は何であろうか。それは弥陀の本願である。不可思議なる弥陀の誓いである。その誓願は端的に「わが名を称えよ」である。阿彌陀仏が法蔵菩薩となりて行われた「五劫の思惟というも、永劫の修行というも、仏の慈悲というも、本願というも、要するに『わが名を称えよ』という一句におさまる」のである。如来の本願が、我ら衆生に接する一点が「わが名を称えよ」である。「ただそのために仏は苦勞されたのである」。如来のご苦勞も、この一事に集約され、焦点が結ばれている。仏の大慈大悲は、「わが名を称えよ」において我らの上に具現している。そうであれば「わが名を称えよ」という一句が本分に聞こえたら、この胸が破れなければならぬ」のである。「わが名を称えよ」と仰せられるそのお心持ち——善導大師や法然聖人によつて「称我名号 下至十声 若不生者 不取正覚」(我が名号を称えること、下十声に至るまで、もし生まれずば、正覚を取らじ)の願文として表され、これによつて親鸞聖人も長き憂苦の生を転じられたのである。すなわち「わが名

を称えよ」とは「わが名をとらえよ、必ず救う」である。「わが名を称えよ、汝の全分を引き受ける」である。まことに「わが名を称えよ」、その一句の中に仏の全生命がこもっておるのである。その一句の御回向の恩徳広大不思議にてわれらが救われるのである。如来の不思議な恩徳が「わが名を称えよ」にこめられており、この一句をいただくばかりで、広大な如来の功徳をたまわるのである。まことによくもこれほど見事に仕上げられていることよと感嘆するばかりであるが、凡夫の感嘆はとてよと及ばないものである。心も及ばず言葉もたえた功徳である。まさに広大不思議としか言いようはない。(了)